

【 窃盗癖患者、闘病日記 】

ここでは、ある 30 代女性患者の闘病日記を紹介します。女性は、摂食障害と窃盗癖があります。詳しい状況は、日記を読み続けていくうちに徐々に明らかになります。

3月15日

13:00 頃病院に到着しました。周囲には民家もちらほらとしか見かけないような山間にひっそりと佇む病院ですが、院内に入ると職員さんや患者さん達がしきりに廊下を行き交い、活気があって明るい印象です。

本日は主治医による診察が 40 分程度ありました。夕食後には摂食障害者のためのミーティングが毎日 1 時間半あり、8 名程の参加者に私も加わることになりました。かなり深刻な方からほぼ回復という方まで様々ですが、いずれの方からもお話を聞いたことは良いことでした。窮地に立ってもがいているのは私だけじゃないんだ、と少し安心したり、参加者の自信と余裕を感じる落ち着いた話し振りに刺激を受けたり……。ただ、私自身のことは緊張のあまりごく簡単に自己紹介するだけで精一杯でした。

3月16日

本日は、朝のミーティングはお休みでした。夕食後のミーティングに本日も参加しました。私はこれまで家に籠りがちの生活を続けてきたせいか、人前に出ることが苦痛で、他人と会話することもことごとく避けてきました。そんな私が自分の意見を人前で発表するのは高過ぎるハードルではあるけれど、ここでの治療はミーティングに重きを置いているので、避けていては回復への道のりが遠く一方だと考え、勇気を出して少しだけお話ししました。

今の自分がどうしようもなくイヤでたまらないのだけれど、このどん底の状態から抜け出る努力をして、自分に対して少しでも愛情を持てるようになりたい。というような内容のお話をさせて頂いたのですが、声はうわずってしまうし、要領を得ない話しぶりで不満足な出来でした。聞いている人はさぞ退屈でウンザリしたろうと思うと、自分の思いを吐き出してスッキリするどころか、かえって消化不良感が残り、後味の悪いものでした。

3月17日

今日は、朝夕のミーティングに加えて昼食の前後にもミーティングや嗜癖問題懇談会(ケースワーカーや看護師を交えた意見交換会のようなもの)があり、さらに主治医による診察等もあって、一日ほぼスケジュールが埋まっているような状態でした。主治医に、人前に出るのも話をするのも苦手な私がミーティングに参加することに果たして治療効果があるものなのかどうか、今の段階では疑問や不安のほうが多いことをお伝えしました。私にとってはミーティングの時間が負担でストレスを感じることはあっても癒しや発散の場になどなり得ないような気がしたからです。先生はそれが普通の感覚で、今ミーティングで積極的に発言できている人達もかつては同じような不満を口にしていたのですよ、とおっしゃいます。現在同室になっている方に尋ねてみても、やはり同じような答えが返ってきます。その方は、治療をスタートしてひと月半くらいは、こんなこと続けていても無意味じゃないか、と治療方針に反発していたそうですが、ある日を境にミーティングの時間を有意義に感じるようになってきたそうです。その後、僅かな揺り戻しはあるものの、以前のような強い渴望感に囚われることはなくなったそうです。話をしたり相手の話を聴いたりしているだけで心境がガラリと変化するというのは不思議としか言いようがないのですが、その感覚が少しでも理解できるようになるためには、必ず治すという強い決意とミーティングに参加し続けることがやはり欠かせないようです。

3月18日

入院時、私に同伴して3泊4日のショートステイを体験した母が本日帰宅しました。母が寝起きする部屋は私の病室とは別の建物で、離れているうえ互いの部屋を往来することは禁じられていたので、めったに顔を合わすことはなかったのですが、院内で私の姿を目にする度に、母はうれしそうに顔をほころばせて近寄って来てくれました。自宅で父母と共に生活している時は、毎日のように小言を聞かされ、些細なことでかっとなっては衝突を繰り返してしまいました。放っておいてほしいのに何かにつけ干渉してくる両親の存在が疎ましく、目障りだと感じることもありました。これ程薄情で、親不考の限りを尽くして来た娘に対して全く揺るがない愛情を持ち続けられる両親はすごい人達だと今回改めて思いました。そんな両親を苦しま

せ続ける自分はこの上なく愚かな人間だと思います。

母は、帰る時間が近付くと私の手を握って「がんばるのよ」と励まし、涙を流しながら去って行きました。すぐに又面会出来るというのに大袈裟だなと私は苦笑しました。でも同時に、泣く泣く別れを惜んでいる母のうしろ姿がいじらしくて思わず涙があふれて来ました。前に母に手を握られたのはいつのことだったか記憶にありません。化粧や服装で若作りしていても、手のほうは皮膚が薄くなってシワシワしていて、すっかりおばあさんになってしまったのね、と思いました。しかし、その手のやわらかさが愛おしくて手が離れた後もその感触の余韻をしばらく楽しんでいました。いつか、私のほうから母の手を握り「これまで苦勞を掛けてごめんなさい」と言うことができたらいいのですが、やっぱり照れて出来ないような気がします。

3月19日

こちらで入院治療をスタートして以来、出席するように指示されたミーティングには一応参加していますが、人前で話をするということに対してとにかく抵抗感が拭えません。憂鬱な気持ちのままミーティングに参加するのですが、話した後でも不全感ばかりが残り、又他の人と比較してしまって、劣等感も強まる一方です。心が拒否反応を示していると、それに伴って体の調子が狂ってきてしまいます。毎日体が鉛のように重くてだるく、座っているのもつらいので横になってみるのですが、泥の中に身を沈めているような寝心地の悪さを覚えます。気分転換に読書でもしてみようかと本を開いてみても、本の内容が頭に入らずあきらめて又布団にもぐり込んでみても、頭をよぎるのは否定的なことばかり。私にとってここに来るという選択は正しかったのか、果たしてこの治療法が私にとって最良の方法と言えるのだろうか。しかし、早々に治療を断念し、逃げ帰ってしまったのでは更生の為の道筋を示して下さった弁護士さんや両親に対して会わせる顔がないと思い、ドロップアウトだけはなんとか思い留まっています。ミーティングに参加しているメンバーは、皆さん自分のことをよく分析されているし、気負わずリラックスして話されている様子なのに言葉が溢れるがごとくに饒舌なので、私はただただ圧倒され感心しっぱなしです。ミーティングの場こそが自分の居場所だとおっしゃる方もいて、何故そんな心境になれるのか、今の私にとっては別世界のことのよ

うで不思議としか言いようがありません。

3月20日

昨日の夕方、院長先生の診察がありました。私が嗜癪を悪化させてきた経緯や現在の状況等をお話しさせていただきました。先生がおっしゃるには、私の依存の度合いはかなり深刻なので、最低1年間は入院治療してほしいとのこと。意見書を書いて頂いた段階では6か月以上となっていたので1年間もミーティングが繰り返される日々を思うと、一瞬気が遠くなりました。でも考えなおすと、この先の長い人生を考えると瞬間に通り過ぎてしまうような短い期間とも言えますし、刑務所にトータル2年半入っていても全く治らなかつた私が、1年で自分の行動や考え方を改めることが出来るなら、むしろ短いと思った方が良くのかもしれない。また、先生は、治療者の立場からは、重症な分それだけ治し甲斐があるし、あなたのような人に立ち直ってもらって、将来、回復者のメッセンジャーとしてこの病院に来てもらえたら、治療者として誇らしい、とも言われました。楽しそうに微笑んでおられる先生を見ながらそんなことは今の私には想像も出来ないことだけれど、もし実現すれば夢のようなことだと思いました。意欲をもって取り組めば必ず回復するから、とも強く言われる様子には余裕まで感じられて、これまでずっと抱き続けていた不安感が少し癒えたような気がしました。そのせいかどうかは分かりませんが、昨日まで1日中気持が塞いで体調も悪かったのが今朝起きたらウソのように解消していました。ちょっとした気持ちの変化が体にまで作用することの神秘を感じました。ミーティングに対する拒絶感も少し軽くなったような気がする1日でした。

3月21日

ミーティングにはなんとか毎日欠かさず参加できています。私以外の参加者はその場で思いついたことを心のままに打ち明けておられるようですが、私の場合、頭が悪いうえに緊張してしまうので全くのアドリブでは言葉が即座に出てきません。だから、毎日どんなことを話そうか考え、事前にネタを作って出掛けます。ミーティングが始まる時間の10分前から何を話そうか考えているので、余暇時間も他のことがあまり手につかないのですが、この考えることが私にとって大事な時間になっている気がします。これまでは、自身のことを突き詰めて考えることは、気の滅入

ることなので避けてきました。でも、今考えることで、過去のどんな出来事がきっかけで自分の歪んだ心が形成されてしまったのか、又、私の価値観のどんなところが異常なのか、少しずつですが心の整理が出来て今まで見えていなかったものも徐々に見えてくるような気がします。院内での日常生活の中からも何か話題になるものが転がっていないか、アンテナを張っている状態なのでポーッと時間を持て余すようなことがなくなりました。今回の入院は期限付きの短期のものなので、回復の期待は持てませんが、次回入院に備えて土台作りだけでもしっかりしておこうと思います。

3月22日

夕べ洗濯物を干そうと外に出てみたら夜の冷気の中で雪が舞っていました。4月を目前にしたこの時期に雪を見られたことが意外だったし、夜空に雪の白さが映えて、素晴らしくきれいでした。しばらくその場に留まって、粒の大きなものを手のひらで受け止めたりして雪の冷たさを楽しんでいました。体が冷えてきたので部屋に入り、布団にくるまると、ほんわかと温もりが伝わってきて、その温もりに包まれることの幸せを感じます。

今日の昼食で久しぶりにパンを口にしたのですが、ご飯に飽きていたせいか、ただの食パンなのにとってもおいしく感じられたことも幸せだし、そのパンに付いていたマーガリンを取って置いて、夕食のご飯の上のせてしょう油を垂らしたら、素っ気ないご飯がたちまちごちそうに変化することも幸せだし、院内の大きな湯船に浸かりながら手足を思いきり伸ばした時も幸せです。

院内の周囲は雑木林と畑ばかりだし、部屋にテレビを置くこともパソコンをインターネットに接続することも出来ないで、本当に娯楽の少ない環境なのですが、何故か家でテレビをつけっ放してどっさりと買い込んだ食料品に囲まれて生活していた頃より心は満たされていて心地良いのが不思議です。

3月23日

保釈されてからこの病院に来るまでの間に、3回ほど過食してしまいましたが、こちらに来てからは出された食事以外のものはあまり口にしないようにしています。今は目標を持って治療に取り組んでいるせいか、治療の方に集中出来ていて、食べたい欲に気持ちを奪われることが

あまりないのです。そのおかげで心を平静に保てているのでしょうか。食べ物の虜になって食べることに支配されていた日々が過去のことのようによろしく思えます。抑え難い食欲の呪縛からようやく解放されつつある状態なのかな、と回復の期待をしかけたのですが……。今日同室の方からもらいもののレモンケーキを分けて頂いて、それを口にした途端ムラムラと食欲が沸いてきて、ああこの場に同じものが30個つみ上げてあったら、きっと一気に食べてしまうだろうな、と思いました。これまで食べることに對する強い渴望感が起こらなかったのは、回復したせいではなくて、病院の食事に食欲を刺激するようなものがあまりなかったせいかなと思います。こう言うと毎日一所懸命作って下さっている方に失礼かと思うのですが、病院食のメニューは基本質素で味付け薄目のヘルシーメニューなので決して不味くはないけど過剰に美味しすぎないために、欲が抑えられていたに過ぎないのだろうと思います。

17年間も付き合ってきた嗜癖から離れるには長期戦覚悟で挑まなければならないのであって一朝一夕にはいかないものと思わなければなりません。早く治そうとあせり始めると思い通りにならないことにいら立ちを感じ、かえって悪い方に陥ってしまうこともあると思うので、まあそんな日もあるさ、と思うことにします。刑務所にいたときは強い食欲が起きた時は、お腹の皮をつねったり引っ掻いたりしながら痛みで気を紛らせるように努めたものですが、今日は飴を1つ口に放り込んで院内を歩いているうちにやり過ごすことが出来たので、少し良い徴候が出始めているのかなという気がします。

3月24日

昨日、主治医の先生と面接したところ、日記を書くなら過去の自分を思い返しながらかくのが良いでしょう、と言われたので、私が成長と共に人付き合いを避けるようになったのは何故か考えてみることにしました。

私には今友人と呼べるような人はひとりもいません。学生時代は、普通よりむしろ付き合いは良いほうでした。下校途中には必ず友人宅や店など、どこかに寄って帰るのに家に着く頃はいつも真っ暗でした。休日も家で一日過ごすようなことはほとんどなく、高校、短大時代はアルバイトにも励み、体はアクティブに動き回っていたけれど、それ

なりに充実した日々を送っていました。短大の頃は1年生の途中まで寮生活をしていましたが、同室の仲間達を誘い出して、夜遊び興じることもありました。懐かしい思い出です。寮の仲間との関係はとても良好だったのですが、門限が早いせいでアルバイト可能な時間帯にも制限が加えられてしまうことが嫌で、私はアパート生活に変えました。

独り暮らしを始めてから、暫くして、食べて吐くダイエット法があることを知り、試してみたら成功だったので、それから体重をキープするために食べ吐きを繰り返し、次第にその行為自体にのめり込むようになりました。万引きをするようになったのもその頃です。盗るもののほとんどは食料品でした。食べることの虜になって、没頭するあまり、楽しかったはずの友人達との時間に次第に魅力を感じなくなり、遊びの誘いが来ても、バイトがあると断って、多くの時間を食べることの費やすようになりました。短大卒業後、私は実家に身を置いていましたが、中学、高校時代の友人6人とは、短大卒業後も交流がありました。その友人達から連絡があれば、体面上断りきれなくて、なるべく会うようにはしていたのですが、女同士が揃うと、必ず食事になってしまうのが嫌でした。高カロリーのイタリアンやファーストフードを口にした後は、早く家に帰って吐き出さなければ消化吸収されて太ってしまう、というあせりの気持ちからソワソワしはじめ、早く帰りたいけれど、帰りを急ぐと気まずくなるし、楽しそうな顔をして相手に調子を合せていても頭の中はうわのそらでした。ようやく家に帰りついて吐こうとしても時間が経ち過ぎて上手く吐き出せない時は本当に友人を恨みました。

昔はその友人達と一緒に過ごすのが本当に楽しい時間で、昼から会っているのに、いつまでも離れ難くて気がついたら夜中まで喋っていた、なんてことがざらだったのですが…。気が合うからこそ付き合っていた筈なのに昔のように会話が楽しめず、上辺だけ繕って興味のない話題にもいちいち反応し、終始演じていることに疲れるようになりしました。会社を辞めてフリーターになってからも、なんとか交友関係は保てていましたが、家で過ごす時間が多くなると、食べ吐きをする時間以外も常にチョコチョコ何かを口に運んでしまう癖がついてしまって体重をキープすることがままならなくなってきました。自分の容姿が太って

醜く変化してきていることに加え、会社勤めをしまっとうな社会人としての生活を営むことが出来ていないことのコンプレックスも加わり劣等感を日増しに増大させていました。一方、友人達はといえば会う度ごと着実に成長を遂げていて、中には結婚し、子育てをしながら勤めにも出ている人もいて、責任ある立場に立って、しっかり地に足をつけ自立した生活を送っている姿がまぶしくて、昔のような対等な立場ではなくなったことをまざまざと思い知らされました。敗北感に満たされて会う度に重く沈んで帰宅している自分に腹が立ちました。

それまでは、友人の1人もないというのは恥ずかしいことだと思っていました。友情を保つことが自分にとって何の利益も生まれない以上、世間体だけで付き合いを続けていることがばかかっていると思えてきました。友達と付き合い合うことは義務でもないのだし、もう一切拒絶しよう、と決めて、その後メールが入っても年賀状が届いても無視を続けました。今では、私のような者の相手をしてくれた数少ない友人に対して、無礼なことをしてしまったと思いますが、その頃は正直なところ、足枷が取れてスッキリしたと感じていました。孤独というのは周りに人が居ながら人の輪に入れぬ時や、信頼していた相手から見放された時には強く感じますが、始めからひとりきりで誰とも接触がない場合は孤独を自覚する境界線のようなものがなくなります。両親に対しても例外ではなく、かけがえのない大事な存在ではあるのですが、一緒に生活しながらふたりの言動にいちいち反応して、無駄に怒ったりイライラしたりするよりは、互いの存在を意識しない生活の方が心乱されることがなく良いような気がします。

人と係わることなく生きていきたいという願望は、一種病んでいるような状態なのか、そうじゃなくて本来の自分はそもそも友人なんて欲しくはなかったのだけれど、世間体が友人を必要としていたに過ぎなくて、その世間体を捨てたことで願望を叶えることが出来たのか自分にもよく分かりません。

3月26日

私は体を動かすことが苦手なので、こちらの病院に来てからも病院の敷地から外に出たことがありませんでした。でも、ミーティング仲間以外を歩いてみたら気持ちいいよ

と勧められて、またこんな自然いっぱい環境なのに院内に籠もりきりというのはもったいないような気がしてきて、散歩に出てみることにしました。赤城高原は気候的にはまだ冬なので周囲の木々は寒々しい姿をしていますが、よく見ると梢に新芽が芽吹き始めているのが確認出来て、遅めの春の到来を感じさせます。落ち葉が厚く積もった上を歩いていると、小気味よい音と共に柔らかさが伝わって来て、足の裏が喜んでいて、と感じました。半時間も歩けば体がほこほこ温まって来て、散策中降り始めた雪が顔に落ちてきてもその冷たさが気持ち良いくらいでした。途中梅園の梅が小さな可憐な花をほころばせている姿にうっとりしたり、牛舎を覗いて牛の大きな顔に見入ってみたり、そぞろ歩きを楽しみました。雪を頂いた穂高連峰は、山を覆う雪が太陽の光を跳ね返し、山そのものが発光しているように見え、その雄大な姿には感激しました。30分程で帰って来る予定で出掛けたのですが戻ってみると1時間40分も経っていました。私はかつて田舎の不便な暮らしに魅力を感じたことは一度もなかったのですが、この病院に来て、不便だけど自然に寄り添える生活のほうの方が自分には合っているかも知れない、と感じるようになりました。

私は、いつでも物が手に入る環境に身を置いて、欲を刺激されてしまうと、押さえが効かなくなり際限なく欲しくなってしまうようです。自宅の室内はどっさり買い込んだもので溢れ返っているにも拘らず、それでもまだ足りないような気がしてしまうし、少しでも減るとまだストックがあるのに落ち着かずすぐに補充してしまいます。そんな日常に慣らされている私が、物のない、しかも直ぐに手に入れることが叶わない環境の中で落ち着いた心持ちで生活できる訳がない、とずっと思っていました。ところが、今ここでは、身の周りには必要最小限のものしかありません。スーパーもコンビニも視界に入って来ない自然豊かな土地で過ごすうち、日ごとに雑念が薄れ、頭がクリアになってきているような気がします。私はこれまで自分の旺盛過ぎる食欲を恨み、食べたい欲望から解放されたいと願う一方、食べることを生き甲斐にしてきたので、楽しみを奪われてしまったら何を目的に生きていけばいいのかわかりません。このように食べ物に対しては愛憎入り混じる感情を抱いて来ました。万引きに対しても似たような感情を持っていて、盗りたい衝動にかられたら、その場では思い止

まることが出来たとしても、一度高まってしまった欲求をどこで吐き出したらいいのかわかりません。なので、本当にどうしても抑えがつかなくなったら盗るけど、その場で死ぬ覚悟で挑もうと思って、物騒な話になりますが、服役中受刑者仲間に銃はどうやったら入手できるのか相談してみたこともありました。

前刑の裁判の際、精神鑑定を担当された医師に「生き甲斐になるようなことが見つければ、万引きも過食もきつとやめられるよ」とアドバイスをいただいたのですが、この悪癖以上に自分の心を満たしてくれるものなどこの世に存在しないので、私の場合、他の事で気を逸らすというのは実現不可能な事だと思いました。しかし、環境を変えてみることで、物事に対する視点が変わり、これまで興味を持てなかったことの本当の良さに気が始めるといってもあるのでしょうか。生き甲斐というのは、探し求めることをしなくても案外身近に転がっているもので、本人の捉え方次第で心地良くなるし、悪くなるものなのかな、という気がしてきました。そのためには、まず、なにより生活の拠点を変えてみるのが大事で、現に今の私は、家から遠く離れて、買い物もせずミーティングや読書や日記に明け暮れる毎を送りながら、過食も万引きもせず心穏やかに生活出来ています。次回こちらに来る時は、1年くらいの長期入院になりますが、この恵まれた自然の景色の中で、四季の移ろう様子を楽しんでみるのも良いかな、と思えるようになりました。

3月28日

昨日、摂食障害者のミーティングに参加した折、仲間のひとりが「今は吐くことを止めているが、このまま止め続けていると、際限なく体重が増えていきそうで怖い。吐くことが苦しいからやめているけれど、苦しみから解放される筈なのに、やっぱり苦しいままだ。」と発言していて、心の中で大きくなずきながら聞いていました。今の私は吐くことが完全に止まっている訳ではないけれど、ピーク時には1日3~4回吐いていたことを考えると、回数をはるかに減っているの、回復途上といえば言える気もします。しかし、食に対する執着は相変わらずで、お腹の皮がつっぱるまで食べないと気が済みません。私の好物だけでお腹を満たそうとすればとんでもないカロリーになるので、吐かない代わりに多量の水分とオートミールやこんにゃく、

もやし等カロリーの少ないもので腹八分くらい満たしておいてから、仕上げに好きな物を口にするようにしています。そういった工夫をしてみても塵も積もれば・・・といった具合で体重増加は避けられません。時々吐いていてもこんな調子だから、完全に吐くことをやめてしまったらどうなるのでしょうか。以前テレビ番組で太りすぎて家から出られなくなった男性がレスキュー隊員に救出されている様子が海外のニュース映像として紹介されていましたが、私は将来の自分の姿を見るようでゾッとしました。

吐くことは確かに苦しいことだけど、それをやめることと引き換えに見るもおぞましい姿になるのなら、回復しないままのほうがまだましです。吐くことが止まって、尚且つ食欲が正常にならないことには、私にとっては回復とは言えません。ひとつ悩みが取り除かれても、又新たな悩みに直面するのは嫌です。ホスピタルでの入院生活では、就寝・起床時間・食事の時刻・量が決められているので、自然に体を慣らすことができます。このことは、入院患者に正しい生活リズムを身に付けさせる上で役立っていると思います。実際、私はこの病院に来て、はっきりと体調が良くなったことを自覚しています。入院前のような抑えが効かない程の食欲が湧くこともありません。しかし、この改善は実は見せかけで、今自分は治療中の身であるという緊張感が食欲の入り込むスキを与えないでいてくれるだけかも知れません。ここで身につけた、ポリウムもバランスも適当な食生活を、退院後、緊張の抜けた生活の中でも実践できるでしょうか？家に帰ったらたちまち元の生活パターンに戻ってしまわないか、と心配です。

多くの人が指摘するように、私自身が他人を見る時は、外見なんてその人を識別するための記号のようなものでしかない、と思えるのですが、逆の立場からは同じようには考えられません。自分については、中身が足りない分、外見がそれなりでないと存在価値を認めてもらえない、という思いが捨てきれないのです。過食嘔吐からの離脱に成功した人というのは、ただ我慢して食べ吐きをしないだけでなく、食欲をコントロールすることに成功した人なのでしょうか。いつか聞ける機会があれば聞いてみようと思います。

3月29日

夕べ見た夢の中に、昔仲良くしていた友人が出てきました。私は、夢の中で友人から見離されて泣いていました。そして目が覚めたら本当に涙が出ていました。その人は友人の中でも一番打ち解けて話ができ、誰より信頼出来る、私の中では特別な存在でした。でも、もう8年以上連絡をとっていません。年賀状を出すこともやめています。それでも先方からは未だに欠かさず年賀状が送られて来て「連絡待っています。」と書き添えられています。しかし、今の私の醜く太った姿を友人の前に晒すことは、考えるだけでも恥ずかしくて、会うことができません。それに、もし会えば当然「最近何しているの？」と聞かれる筈ですが、正直に答えるとしたら、「家に引き籠っているか、刑務所にいるかのどちらかです。」と言うしかありません。嘘を付いて作り話をしてもぼろが出ることは目に見えています。好きな人に対して、その場を取り繕うための嘘をつけて、本当の自分を覆い隠しながら接していても、苦しくなるだけだから、今彼女がどんな生活を送っているのか、気にはなるけれど、これから先も当分会うことはないと思います。

夢の中では、私が関係を切られる側だったけれど、実生活では、連絡を絶ったのは私のほうです。申し訳なくは思っていますが、罪悪感を持つと余計に苦しくなるので、考えないようにしてきました。何故今になって彼女が夢の中に現れたのか、よく分かりません。何か彼女に対して捨てきれない思いを抱いているからかもしれません。夢と言えば、日頃から強く意識していることは夢に見やすい、と言いますが、私の場合、確かに万引きして捕まる夢や、食べ過ぎて後悔する夢はよく見ます。夢の中で食べている時は、大好物のオンパレードなのですが、全く美味しく感じられないのが残念なところ です。

3月30日

今日も快調。治療の成果を感じています、と言いたい所ですが、どうしたことでしょう。ここに来てスランプに陥り始めているようです。今日までを振り返ると、入院してから5日間は気持ちが減入って仕方なかったのですが、6日間頃から急に気持ちも体も軽くなり始めて、もしかしたら、自分はもうすっかり回復していて、もうとっくに無くしてしまったと思っていた人間らしい感覚を取り戻し始めているのではないか。更には、これまで私に取り憑いていた悪い憑き

物が落ちたのかな、などと突拍子もない考えをめぐらしていましたが、そうではないと思い知りました。というのは、昨日から急激に調子が落ち始めたからです。ミーティングに参加していても、他人と自分を比較して羨んでしまう悪い癖が出てしまいます。ミーティング参加者の多くはコミュニケーション能力に長けていて、話し方も理知的で、常識感覚も充分備わっているの、生きにくい現代社会でも、この人達ならきっとうまく立ち回っていけるだろうし、言葉のチョイスを誤って、他人から嫌われたり、誤解を招くような失敗をしたりということもまずないだろう。それに比べて、この私は人付き合いが下手で、話すことが苦手で・・・、などと考えてしまうのです。ご自身を卑下される言葉を聞いても、なんだか日本人特有の謙遜でしかないように思えて、白けながら聞いてしまいます。そんなふうに違い探しばかりしているので、患者同士を仲間と呼び合うことにも何だか違和感を持ってしまいます。もしかしたら自分はとんでもなく場違いな所に紛れ込んでしまったのではないのか。自分と他の参加者とは対等な関係ではないのでは？

主治医と面談をしていますが、穏やかな笑顔で私の話を聞いてくださる先生は実は心の中では、犯罪者である私に侮蔑の目を向けているのではないかと。気休めに、「ミーティングに出続けて頑張っていれば・・・」と言いながら、本音は、刑務所暮らしを2度も経験しながら立ち直れないような人間にミーティングの効力は期待できないだろう、と思っただけではないか。そもそも先生は、医師という立派なお仕事に就かれている方で、だからもちろんずっとエリートコースを走ってきた方で、しかも美人で欠点なんてまるでない。きっと常に周囲から褒めそやされて生きてきた方だろうから、社会から弾かれた人間の気持ちなんて理解できないのではないかと、などと疑いの気持ちが頭をもたげます。自分の今の状態を言葉にして伝えようと思っても、不安の原因が特定されている訳でもなく漠然とし過ぎているので、言葉にできないもどかしさを感じています。そんな思いで主治医と面談をしているので、不甲斐ない自分への怒りも加わって、後味の悪さだけが残ります。

私は普段から食い意地が張っているのですが、気力が萎えると一層食欲が増してしまうので、昨日あたりから特に空腹感が強くなってきました。その空腹感を押さえ込むために、多量の水分を取ったり、飴やガムを口にいれて

みたりするのですが、ちっともお腹は満たされず、飢餓状態のように食べ物を欲してしまいます。今回私は、ここにダイエットに来た訳ではないのですが、この食事は1日に必要な栄養素と熱量は満たしていますから、三度の食事をきちんと摂っていれば間食は必要ないので、口寂しい時は飴かガムでしのぐようにして、他のものはほとんど口にしないようにしていました。しかし、どうにも居ても立ってもいられず、そのまま手につけずに持って帰ろうと思って、スーツケースの奥に目に触れないように仕舞ってあったお菓子とお汁粉を引っ張り出してきて食べてしまいました。さらには、誰かが廊下に落としていったらしいクッキーが1枚目に止まったので拾い上げ、誰にも見られていないか確認してから口に放り込み、床に食べ物が落ちていたのだから、ごみ箱にも何か食べられそうな物が捨てられているのではないかと、開けて覗き込んでみました。野良犬並みに卑しさを剥き出しの行動が何のためらいもなく出来てしまう自分は人の姿をした餓鬼なんじゃないかと思えてきます。これまで自ら課してきたルールを守ること、毎日順調にコツコツ積み上げてきた成果を破綻させてしまったことによって、たちまち振り出しに戻ってしまったような気がします。

3月31日

昨日の日記は、実は今日になって、前日のことを思い出しながら書きました。昨日はどうにも気力が沸かなくて、書くことが出来なかったのです。でも今日になって、こんな気分の時もあったということ記録しておきたかったので、書いておきました。これまで私はミーティングで発言する時には、治療に対して意欲的であることを強調してきたのですが、今朝はどうしても前向きな言葉が出て来なくて、治療に対する不信感やミーティングの効果に対する不安など、終始愚痴をこぼしてばかりになってしまいました。私の否定的な発言を不快に感じられた方も多いのではないかと案じていましたが、ミーティングの終了後にまだ知り合っただけの浅い仲間達が口々に、「自分も初めはそうだった。」とか「苦しい時はいつでも言って頂戴」といった励ましの声を掛けてくれました。温かい言葉に本当に勇気づけられました。

こんなに親身になってくれる人達を羨んで卑屈な感情を抱いてしまった自分は、本当に子供じみていたと気付かさ

れます。今日ミーティングで話したことを、例えば、他の依存症を抱える人に話してもなかなか伝わらなかったかも知れませんし、励ましの言葉もこれ程心には響かなかったかも知れません。接食障害や窃盗癖という同じ苦難を経験した人達が身近に居ることの心強さに、ここにきてやっと気付かされました。

これまで私はミーティングの最中も、他のメンバーと同じ空間に居ながら独り蚊帳の外に置かれたような違和感を持ちながら参加していましたが、今日は、仲間との距離が少し縮まったような気がしました。これが、ミーティングの醍醐味なのかもしれません。

今日の午後には、主治医が私を見掛けて声を掛けて下さいました。私のことを気に掛けて下さっていることに感謝しなければならないのに、性悪女の私は、又々愚痴ばかり並べたててしまいました。お気を悪くされたのではないかと心配になるほどでしたが、先生は、「あなたは最初から頑張り過ぎたから少し気疲れしちゃったのかな。」と優しくおっしゃいました。先生の見立てによると、私の治療経過は悪くはないそうです。治療者の立場としては、患者さんが治療に全く抵抗感を持つことなく、何時でも順調、と主張されると、逆に不安になります、とのことでした。回復への道は常に前進あるのみ、というよりは、時々足踏みしてみたり、少し後退することもあったりしながら、長い目で見てちょっとずつ前進していくものようです。

私は単細胞なのでしょうか。2日半くらい悩みを続けていたものがミーティングの仲間や先生から少し励ましや助言をいただいただけで、随分気持ちが軽くなったようです。あ、それと、院長先生にこの日記を読んで頂いたところ、「あなたには文才があるよ。内容も表現も素晴らしい。」と身に余るお言葉を頂きました。過剰に褒めちぎっていただいたことに、気を良くしたせいもあるかも知れません。なにとはともあれ、すっかり元の悪い自分に戻ってしまったような落胆ムードから、今日は、何とか持ち直すことが出来て、ホッと胸をなで下ろしています。

4月1日

昨日からルームメイトの入れ替わりが激しいです。私は今、二人部屋で生活していますが、半月以上寝起きを共にして、艱難辛苦語りつくし、私にとっては、一番密度の

濃い付き合いができた仲間が昨日退院されました。今日、隣の空ベッドを眺めながら、玄関で握手を交わして、見送った友と過ごしたこれまでの日々を思い返しながらか感傷に浸っている最中、看護師さんが部屋をノックして顔を覗かせ「もうすぐ新しい方が入ってくるからよろしくね。」と声を掛けて行かれました。そして数時間後に可愛い女の子が入って来られました。最初は、そわそわして緊張されている様子でしたが、消灯後、ベッドに寝そべて話している間に会話が弾み「気の合う人と一緒に部屋になれたから、ここに来て良かった。」と言ってもらって、喜んで床に着きました。ところが、翌朝、どういう訳か、その女性は随分気落ちされていて、「ここに来て鬱が出てしまうから、やっぱり私に入院生活は無理。」と呟いて早々と帰って行かれました。私は、「一緒に頑張っていこうよ。」と思い止まるように説得してみたのですが、力が及びませんでした。新しい友の決心を変えられなかったのは残念でした。しかし、帰り際、「沙耶ちゃんに会いたくなったらまたここに来るかも知れない。」と笑顔を向けてくれたことで少し安堵して、そうしてくれることを期待することにしました。それから又、さほど時間を置かず新しい患者さんが入って来られて、今日は何だかばたばたする1日でした。

でも考えてみると、私はこの入院中、ずっとルームメイトには恵まれているようです。今日入院して来た女性も、屈託ない笑顔が可愛いととても気持ちのいい方です。積極的に話し掛けてくれるので、すぐに打ち解けることが出来て、夕刻のミーティングが始まる直前までしゃべり続けていました。私とは別のミーティングに参加する彼女とは一旦別れ、自分のミーティングが終了して戻ってみると、まだ彼女は帰って来ていませんでした。彼女のベッド周辺はカラフルなバッグやぬいぐるみ、大きな写真立てなどが所狭しと並べられています。すっかり明るい雰囲気になって、病室じゃないみたいだわ、と眺めていると彼女がご帰宅。私が「ミーティングどうだった？」と尋ねると、突然泣き出し、「ミーティング初日から嫌われてしまって、部外者扱いされてしまっているようだ。」と訴えます。話を聞いてみると、どうも思い違いをしているようなのですが、本人は明日からミーティングに参加するのが怖くなったらしく、ご両親に「やっぱり明日退院するから。」と迎えの要請をしています。昨日は説得に失敗してしまったので、今度こそは、という思いで気合いを入れて入院を続けることの必要

性を力説してしまいました。熱っぽく語ったことが功を奏したらしく、今度は何とか思い止まってもらうことができました。

そしてその後、自分のしていることを振り返って、普段の私とは正反対の思考行動パターンに、自分でも驚いてしまいました。本来孤独癖の私にとっては、視界に誰も入って来ない独りきりの状態がベストのはずですから、部屋から人が居なくなってくれることは喜ばしいことなのですが、どうしたことでしょう。せつかく他人に気遣いのできるやさしい女性に成長できている人なのに、治療を断念して、回復の機会を遅らせてしまうのは勿体ないと思いました。彼女はまだ 20 代ですから、依存症に陥ることさえなければ、青春時代をもっともっとエンジョイできた筈です。本来の自分に戻るための治療の機会を逃がして更に人生を無駄にしてしまうのは、魅力的な女性だけに、忍びないことです。

一方、今の私は、他人の心配などしている場合ではない筈なのですが、お節介を焼いてみる気になれたということとは気持ちにゆとりが出た証拠かもしれません。それに、上辺だけでなく、本心からいたわりの心を持って他人に接することができたことは、大きな成長と言ってよいのではないのでしょうか。もしかしたら、孤独癖は、本来の自分ではなく、このように優しい自分が本来の私で、今その自分を取り戻しつつあるのでしょうか。よく分かりませんが、どちらにせよ、自分がこのような優しい気持ちになれたことを嬉しく思いました。

私が退院を押し止めたことが、彼女にとって「有難いこと」なのか「余計なこと」なのか、それは、彼女がこれから指示通りの治療を継続して、ある程度の期間を経てからでないと解らないことです。将来、彼女が今回のことを正しい選択だった、と振り返る日がくることを私は祈るばかりです。

4月3日

この病院に来て、ミーティング等に参加していると、仲間の家庭環境についても徐々に知るようになります。そして、多くの人に共通していると思われるのが、家庭の存在がその人の病歴の中でかなり大きなウエートを占めている

ということです。私は、これまで両親と同居していたので、毎日顔を付き合わせていたせいでしょうか、それとも、食べることに気を取られ過ぎていたせいでしょうか、自分が家族の存在をどのように捉えているのか、今まであまり考えたこともありませんでした。そこでこの機会に自分に問いかけてみることにしました。

私は、家から一歩外に出ると、人畜無害な人間を装い、怒られないように、嫌われないように、他人の顔色を窺うのに懸命です。でも、家では恥ずかしい姿も全てさらけ出して生活しているので、この世で素のままの私を知るのには、父と母二人きりです。素の私は、本当に他人が見たら身震いする程に卑しくて醜い人間なので、そんな私を知っていながら愛し続けようとしてくれる両親のことは、全く不可解としか言いようがありません。私のような親不孝な娘を愛しても、与えても、何も返って来ないどころか酷い仕打ちを加えられるのみで、得なことなどひとつも無いことはもう充分分かった筈なのですが……。人と人が繋がりを持つ時には、利害関係を全く抜きには成立し得ないと私は思っていて、それは、親子の場合でも例外ではないというのが私の基本的な考えなのですが、私の両親を見ていると、この二人に限っては、無償の愛の存在を認めても良いような気がします。

私は、自分の食費に多額の費用を注ぎ込んでしまうため、近い将来自分の貯金から家の財産まで全てを使い果たし、今のように食べ続けることがままならなくなるのではないかという不安を抱えています。ですから、日常生活においては極端な程の節約主義を貫いています。痩せていた頃には、外見をより良く見せる為に、洋服、アクセサリ、化粧品、エステ等に惜まらず投資していましたが、太って家に閉じ籠もるようになってからは、食費のために資金を確保しなくてはなりません。大事なお金を、身なりを整える為に使うことがばからしく思えてきて、まず洋服はリサイクル品のみとし、髪は自分でカットするにしました。シャンプー・リンスを使うのは勿体ないので、体を洗う石けんで頭も洗います。水道・光熱費も無駄にはしたくないので、お風呂の水位は低めに設定します。両親に後からたし湯されるととても腹が立ちます。食器洗いを母にやらせると水を使い過ぎるので、絶対にやらせませんし、父が時々水道の蛇口をきちんと止めずに放ってあるのを見

てしまうと、その日1日中イライラしてしまいます。室温が熱すぎても寒すぎても、衣服の調節でしのげる程度なら、エアコンは使わせたくありません。特売日に買えば安く手に入る物を定価のままで買われることも許せません。自分の決めた節約ルールを家族が守ってくれないと気が済まないのです。いちいち文句を言うのですが、両親は細かいことに口を挟まれることを煙たがって、なかなか聞く耳を持ってくれません。何も難しいことを要求している訳ではないのに、両親に実行してもらえないことが歯痒くて、私がしつこく食い下がると、

「些末なことできり立っているけど、そう言うあなたはもっと遥かに重要なことが出来ていない」

「電気や水道の出費なんて微々たるものだから、仕事をすれば直ぐに取り戻せる。それなのに、あなたは1日中テレビ見ながら食べてばかり」

「そんなに嫌なら、この家から早く出て行って自分の思う通り生活すればいい」。

お決まりの文句はこんな具合です。確かにごもつとも。全く異論の無い筋の通った理屈なのですが、黄門様の印籠をかざすように私の弱点を引き合いに出されて、私の要求を遮断されてしまうことが本当に不愉快です。そこまで言われて口惜しいから見返してやろうじゃないの、と奮起すれば二人の攻撃を跳ね返すことが出来るのですが、それが出来ない意気地無しの方が情けないです。

昔の私と、現在の私とでは、自分の意識の中で父と母、それぞれの位置付けが変化してきていることは感じられます。母は私が物心つく前から絶えず仕事に励んできた人なので、親子の触れ合いが乏しく、母に殴られた記憶も無ければ、母から愛情を掛けられた記憶も特にありません。母の育児は、生まれて来たから養っている、といった感じのクールな接し方だったと思います。可愛い洋服やおもちゃなど、ほとんど買い与えられたことはありません。学校で食べる昼食の弁当が、周りの誰の弁当より手抜きされていることが恥ずかしくて、私は、いつも蓋で隠しながら食べていました。せめて、小学校の卒業式くらいは晴れ舞台だから、お洒落させてくれとせがんでみたのですがあっさり拒否されました。「買ってこないなら卒業式には出ない」、と私が言うと、母に「どうぞ。」と言われたので、抗議のために泣く泣く卒業式をボイコットしたほどです。

私に対しては、一貫して素っ気無い態度の母親は、兄に対しては、一転して子煩悩で気のきく母親に変身する人でした。兄は全てにおいて私より優れているので、無理も無いことなのですが、子供ながらに母性愛のベクトルは兄の方にのみ向かっていると感じていました。私は、兄のことが昔からずっと嫌いでした。同じ腹から生まれて来た他人だと思っていました。母は、私と兄とを比較し、私と女友達とを比較して、どれ程私が劣っているか、何度も私に言い聞かせていました。

母の目の前で私が兄に殴られていても、母は離れた場所から口で注意するだけで、間に割って入って止めてはくれませんでした。優しい母親をもった友人を羨むこともありましたが、まあ親は選べないからと諦めていました。しかし、私が高校生の時、天敵である兄が遠くに住まいを移し、目の前から姿を消すと母の態度が急激に軟化し始めました。取り分け私が度々問題行動を起こすようになってからは、痛々しいくらいに心配し、常に私のことを気に掛けてくれる様になりました。更に近年は、私のことを自分の分身のように捉えている感があって、「あなたが幸せになればお母さんも幸せになれるし、あなたが受ける罰はお母さんに対する罰でもあると受け止めている」と口にすることもありました。この母の変化は、愛情を示す対象が、兄から私に移ったこともあるでしょうし、少し偉そうなことを言えば、年輪と共に人格的に成熟した為でもあると考えています。私が昔、母に対して抱いていた不信感はどうも消え去って、今の自分にとっての最大の理解者は、母だと思っています。

一方、父の方はと言えば、母とは打って変わって子供の頃の私にとっては、理想の父親像を体現したような人でした。人柄は穏やかで、何をやらせても器用にこなすし、常に前向きな努力家でした。母と兄と対立していても、大体私の方を擁護してくれたので、砦のような役割を担っていた心強い存在でした。ただその唯一の拠り所である父が出張や単身赴任で不在の時が多く、幼児期の私は、父の帰りを指折り数えながら、待ち侘びる日々を送っていたことを記憶しています。このように、父に対しては、幼い頃から変わらず敬愛の眼差しを送り続けてきたのですが、あれ程しっかり者だった父も、寄る年波には勝てな

いようで、近頃物忘れが頻繁になったり、おおらかだったのが少し頑固な気性が目立つようになってきたり…。尊敬できる要素ばかりだったものが、負の要素によって、少しずつ覆い隠されていくことを、年だからね、と寛容に受け止めることができず、最近の私は、父に失望したり、それが高じて怒りや憎しみを覚えてしまったりすることもあります。

この先、年々年老いてゆく父を、温かい眼差しをもって見守ることは、今の自分にはできそうもありません。自分にとっても、かけがえのない存在で、これまでめいっぱい愛情をもらっていることを承知しながら、父の一挙手一投足に心乱され、愛情を薄れさせてきている自分が怖いです。この先父といがみ合うような関係にはなりたくないし、母に寄り掛かり過ぎて、重荷を負わせ続けることもしたくないので、二人とは距離を置いた付き合い方をすべきなのかも知れません。

ただ、そうかと言って、独り暮らしには不安がいっぱいです。家賃や光熱費など、経済的な負担が増えますし、20年間生活してきた我が家に対する愛着も強いので、離れ難いのです。特に、テレビと冷蔵庫が側にあるダイニングルームは、最も落ち着ける自分の居場所です。実のところ、寝ている時間以外の大半は、この部屋で過ごしてきました。しかし、この部屋の余りの居心地の良さが、私の自立心や社会性を奪ってきたとも言えそうです。私には、この先服役とその後1年間の入院が待っています。ですから、独り暮らしと言っても随分先の話になりますが、この期間は、自分の心を成長させる為には必要なのかもしれません。

今日、この病院の大きな温泉風呂の浴槽に身を沈めながら、やっぱり、たっぷりのお湯に浸かるのは気持ち良いな、と思いました。帰ったら自宅のお風呂のお湯も、もう少したっぷりめに入れて、両親にも肩までゆったり浸かる幸せを感じてもらわなきゃ、と思いました。

4月7日

今日の夜のミーティングで仲間の一人が「数日前から身内の所在が判らない。もしかすると、既にこの世に居ないかも知れない」と、苦しい胸の内を吐露され、萎れ切った

顔をされていました。この話を耳にして、瞬間的に父と母の姿が頭に浮かびました。その理由については後ほど…。

私は、この病院に入院して、前半の時期は初めての環境に身を置いている緊張感と、今度こそは自分を狂わせてきた悪癖と決別できるかも知れない期待感に胸を膨らませていました。気概をもって治療に励んできたものですから、雑念の入り込む隙があまり無かったのでしょうか。その間は、入院生活のみに意識を集中することが出来ていたような気がします。しかし、日を重ねる毎にミーティングに対する拒否反応が次第に薄れ、気持ちの上では幾分ゆとりが生じて来ると、そのゆとりの部分を埋めるように、私お得意の後ろ向き発想が影を落とし始めました。

暫く頭の隅っこにうっちゃっておいた事なのですが、ここで病人面して守られた環境で生活している私は、一步外に出たら立派な犯罪者で、誰からも眉をひそめられる存在なのです。しかも、現在裁判進行中で、実刑は確定ですから、収監される日を間近に控えています。今回就いて頂いた優秀な弁護士さんのご尽力が無ければ、保釈さえ叶わなかった程の危険分子です。私は間もなく刑務所送り…、と今の自分の立場を自覚し始めると、過去に体験した受刑生活が悪夢のように甦り、私の胸を絞め付けます。

私は過去に2回服役しましたが、最初に実刑判決を受けた際には、取調べの段階では、担当検事さんから「執行猶予をとれるかも知れない」と伝えられていたのですが、下された判決は予想以上に厳しいものでした。控訴すれば実刑を免れることも出来たかも知れないのですが、時間の無駄になる可能性もあるし、前向きに考えれば、受刑生活というのは自分に喝を入れる為の有効な手段になるかもしれないと、その時は思いました。刑務所内の規律に則った生活を送るなかで、規範意識を身につけることが出来れば、受刑生活もプラスな体験になる筈だから、性根をたたき直すための修行の場と捉えて、甘んじて受け入れることにしました。

実際、服役してみてその目的が達せられたかと言うと、

そうはならなかった結果が今の私です。むしろ入所前よりも人格の歪みをさらにいびつな形に変形させて社会復帰することになってしまいました。

刑務所という所は独特な世界で、各工場内、居室内でカースト制のような厳しい序列が形成されていて、そこからはみ出そうとする人には厳しい制裁が加えられます。日常的にいじめや諍いが繰り返されていて、平気で嘘をつかれたり、告げ口されたりします。噂話や陰口に加わらないと、仲間には入れてもらえないので、必要に迫られ、受刑者同士の力関係や個々人の罪名などを、不本意ではあるけれど熱心に覚えました。私にとっての受刑生活は自尊心を破壊され、激しい過食要求と戦い続けるだけの日々でした。

刑務所という所は矯正施設と謳ってはいますが、実際には、そういった役割を成していないような気がします。中には、自分の場合は、更生の一助になったと受け止めている元受刑者の方も居られるかもしれませんが、刑務所を出て、更生している人の多くは、服役したから更生したのではなく、もともと正常な倫理観を備えていた人が、ほんの一時、心に隙を作ったために犯罪に走ってしまっただけで、そういった人達は、そもそも受刑生活を経験しなくても更生出来ていたはずの人達だと思います。

私の場合は、過去2回の刑で、醜悪な人間の本性を垣間見て、人間に対する不信感を更に増大させ、出所してきたので、これから前刑より遥かに長い刑を終えて出所する頃には、満身創痕の状態で廃人のようになっているのではないかと。そんなことが頭の中を駆け巡り始めると混乱する一方で、正直、平常心を保つことが困難になります。逃げ場の無い、追い詰められた心理状態に落ち込んだ時、この病院を知らず、依存からの離脱という光源を見出せないまま、家に籠っていた頃の私ならどんな発想に行き着いただろう。黙って裁きを受け入れる度胸を持てたのだろうか……。

今日のミーティングで、仲間の悲痛な訴えを聞きながら、彼女の姿に、私のことで不安を募らせている両親の姿を重ねてしまいました。けれど、この病院と出会って、目標を持つことが出来た今、どんな困難も受け入れて踏ん張

って生きて行く覚悟が出来ました。自分の両親にだけは、彼女と同じような苦悩を与えてはならない。両親の最期は、必ず私が看取ってあげます。

そして、今の私には、生き抜く為のエネルギーを注入してくれる心強い後ろ盾があります。私の回復を期待して、次回入院を心待ちにして下さる院長先生、主治医の先生がおられます。そして、多忙な中で私の為に奔走して下さった弁護士さんも応援して下さいます。それに、将来、ここに戻って来れば、苦しみを分かち合い、共感し合える仲間が居るはずで。私が戻って来る頃には、メンバーの顔ぶれはすっかり入れ替わっているでしょうが、馴染みのない者同士でも共に入院生活を送る中で、良好な関係を構築していけると思います。

ここに来る以前は、人間社会の厳しさに打ちのめされて、人との接触を恐れて身を隠してしまっていた私ですが、ここに入院・通院されている患者さん達と接していると、私がこれまであまり会ったことのないタイプの人が多いことに気付かされます。院内での私は、あまり自己演出せず、格好悪い姿も曝け出してしまっていることが多いですが、にもかかわらず、自分に向けられる視線も態度も温かいのです。そのことを最初の頃は意外に思いました。しかし、最近思い始めているのは、これこそミーティングの成果ではないかということです。ここに救済を求めて来る人達は、皆心に傷を負って来た人達ばかりで、だからこそ、他者の心の痛みも理解出来るし、ミーティングを繰り返す日々の中で、いたわりの気持ちを持って相手を見守ることのできる心根が醸成されたのだらうと解釈しています。

私はこれまで、自分も含めて九割九分の人間は「悪」と信じて来ましたが、最近その思い込みが過ぎたかも知れないな、と感じ始めています。絶望を受け入れた上で、そこから立ち上がり、力強く生き抜こうと戦っている人の姿は美しいです。その人達の仲間に加えてもらって、一緒に戦って来られたことを、今は感謝しています。

4月10日

入院生活もあと1日と迫っている中で、今日までの日々を振り返ると、余りにもめまぐるしく過ぎゆく日々で、本当に1ヶ月弱も居たかと疑いたくなるくらいですが、時間が

短く感じられるということは、それだけ内容の濃い時間を過ごせたということだとも思います。

正直言うと、ここに来る以前は、治療には100%前向きという訳ではありませんでした。前刑の裁判の際、精神鑑定された先生の見立てだと、病院での治療の必要性は感じておられない様でしたし、第一、病院に行くとなると他人である医師に自分の醜態を全て暴露しなければなりません。私は、そのことに強い抵抗を覚えました。しかし、担当の弁護士さんがわざわざ資料を取り寄せて、推薦して下さいている病院だし、病院に行くことを理由に保釈を貰うことが出来るかも知れない、という打算も働いて、入院の意思を示したのです。

私の場合、言うまでも無く、物を盗る行為は明確な意思を持って行った行為で、決して混濁する意識の中で行った訳ではありません。アルコールや薬物依存の場合は、中毒性のある化学物質によって、一種脳が冒されている状態なので、正常な自制心を働かせるのは困難でしょうから、これは専門家のサポートの必要性を感じます。しかし、本能のままに行動してしまう子供っぽさと言うか、私のように、逮捕されて痛い目にあっても直らないのは、学習能力の無さ。つまり、頭の悪さが招くことだと、私なりに理解していました。悪い頭を良くして下さいと医療機関に求めるのは筋違いで、他人から嫌われて困っているから、好かれる性格にして下さい、と言うのと同じ意味合いのムチャな要求だと自分では思っていました。しかし、この病院に来て、入院中の方、回復して退院された方のお話に耳を傾ける体験を重ねるうちに、自分を溺れさせていたのは本能ではなく、不健康な心だということに気がきました。

内科や外科と違って、この病院では、治療は主治医に全面的にお任せという訳にはいきません。医師は患者にとって最良の環境を整えて、相談に乗り、注意深く見守って下さるという点で大きな心の支えであり、欠かせない存在ですが、治療していくのは基本的には患者自身なのです。治療した経験などない者が、自分で自分の心の病んでいる部分を「ミーティング仲間」という道具(道具は失礼かな)を使って治療し、回復させてゆくのです。当初私が期待していたような、ある日突然に開眼するような形の回

復はありません。猛ダッシュで突き進んでいくような回復も、今までお話を聞いた中ではありませんでした。自分流の例え方をすると、暗闇でばら撒いてしまったビーズを、手探りしながら拾い集めるように、少しずつ少しずつ時間を掛けて・・・、時には床のビーズに足を取られてすってんころりん、なんて事もありながら、徐々に成果を出していくものなのでしょうか。今の私は、摂食障害と窃盗癖の治療をそんなふうに理解しています。

私は、入院中の現時点では盗りたい、食べたい欲求は収まっていますが、それは、物理的にそれが行いにくい環境に身を置いているためであって、退院すれば、心の底では依存から全く離脱できていないことを自覚するかもしれせん。しかし、基本的な心の持ちようは、この短い期間でも変化してきたと確信しています。心の健康を取り戻すことから回復の足掛かりを得ていくのです。その事を理解できたこと、これだけで大いに収穫はあったと考えています。次回の入院に備えての土台作りが出来たということで、両親と弁護士さんに良い報告が出来そうです。

一昨日、院長先生と面談した際、私の日記をホームページに掲載させてもらっても良いか、との打診を受けました。勿論二つ返事で是非使って下さい、と申し上げました。つたない文章ですが、どこかで誰かが読んでくれているかも知れない、と思うと書くのにも張り合いが生まれて、何よりワクワク感があります。窃盗犯というのは、立派な犯罪者ですから、誰にも打ち明けられないけれど、実際には、当人にも制御できない悪癖に困惑しながら、悶々と過ごしている人が多いはずで、治療可能な病であることを知らずに悩んでいる方が、潜在的に少なくない数いらっしやると私は思っています。その中の一人でも、たまたま私の日記に目を止めてくれて、共感してもらえる所があれば、この病院にも興味を持ってくれるでしょう。盗癖と決別する為に励まし、支え合える仲間がひとりでも多く病院につどってくれた方が、私も心強いです。

これまで、日記をつける習慣はまるで持ったことがありませんが、ここに来て日記を続けているうちに、日記の威力を実感するようになりました。日記をつける時間は、自分の心と対話する時間です。いわば一人ミーティング。心の中で鬱積している澱のようなものを取り出す作業です。

私はまだ治療をスタートしたばかりで、効果を肌で感じるまでには至っていません。ホームページに掲載して頂くからには、日記をハッピーエンドの形で完結させたいので、長めのインターバルを挟んだのち、経過を記録してこの作業を続けるつもりです。

クレプトマニア(病的窃盗)の入院治療を本格的に導入されている病院は、国内ではこの病院のみだと伺いました。院長先生は先進的な取り組みをされている方なので、クレプトマニアといっても、世間的にはまだまだ認知度は低く、開拓していくのに時間の掛かる分野だとは思いますが、今後、他の精神科医にも治療の必要性を訴え啓蒙し続けて頂きたいです。先生の取り組みに賛同して、この治療法を取り入れて下さる病院が増えていくことを期待しています。

私が先生のために出来ることといえば、私自身が転落人生から再起することで、この治療の有効性について更に確信を深めていただくことでしょうか。私は院長先生のお人柄に魅了されています。会ってたちまちファンになってしまいました。そして主治医の先生は、女性として魅力的な方で、私が男だったら絶えず追っかけ回していたでしょうね。ここで先生方と出会えたことが、私の今後の人生を変える転換になるような気がしています。先生方に「お帰り。待ってたよ」と声を掛けて頂ける日を今から楽しみにしています。

今回は、院内の桜の開花を目前に退院することになってしまいますが、今回は1年間の入院を予定しているので、どの季節に來ても退院の日までには開花した桜を愛でることが出来るはず。明日はこの病院の敷地内で満開に咲き誇る桜の姿を思い浮かべながら帰途に就くことにします。

この日記を病院のホームページに掲載したいという院長の申し出に励まされ、再開を決意していたDさんの日記はこの日で終わっている。

以下、単行本、「彼女たちはなぜ万引きがやめられない

のか？ 窃盗癖という病」からの引用(一部改変、および省略)

『季刊 刑事弁護67号』(特集:裁判員裁判における否認事件と弁護/現代人文社、2011年)に掲載された田中拓氏(香川弁護士会)の刑事弁護レポート「あるクレプトマニアの情状弁護で新人弁護士が得たもの」に一連の経緯が詳しく記されています。

*

Dさんと田中弁護士の出会いは、国選弁護人としての指名でした。田中氏が弁護士業務を始めて間もない2010年の2月初旬、食品ばかり12点を盗んだDさんと接見した田中氏は、「お金が惜しいということもあるけど、盗みに成功することが快楽みたいと感じられる」「万引きした商品は、見た瞬間に衝動的に欲しくなり、手を出しました。買うつもりでいた商品を万引きすることはありません」といった彼女の供述内容に違和感を覚えました。なにせDさんは、2005年以降に3件の万引き窃盗を繰り返し、それぞれ懲役1年(執行猶予がつくが、後に取り消し)、懲役6ヵ月、懲役1年となり、3度も服役を経験していたからです。

それら3件の前科のうち、直近の事件を担当した先輩弁護士に相談した田中氏は、その先輩の口から初めて「クレプトマニア」や「窃盗癖」という言葉を聞かされます。インターネットで情報収集し、その実態や治療方法について各所に問い合わせしてみたところ、異口同音に名前が挙がってきた治療施設が、赤城高原ホスピタルでした。

さっそく田中氏は竹村医師に連絡を取り、(Dさんの個人情報には伏せつつ)意見をうかがってみたところ、「その方が窃盗癖者クレプトマニアである可能性は高く、適切な治療を施せば再犯可能性は低下するものと思われる」との回答を得ます。と同時に「通常の窃盗癖者クレプトマニアは、責任能力には影響を及ぼさない」との見解も竹村医師からは示されました。

田中氏は、Dさんとその家族に「窃盗癖クレプトマニア」の事実と竹村医師の見解を伝えたところ、本人も家族も「治療で治るものならば、ぜひ治療したい」との意向が示されます(しかし、後で判明したところでは、Dさんはこの時点では、治療に対して心の底から乗り気だったわけではなく「あくまでも保釈が目当てだった」とのこと)。しかしDさんが勾留されているのは香川県で、病院のある群馬

県ははるか遠方でした。保釈請求に向けての田中氏の弁護活動が始まりました。

まず赤城高原ホスピタルのウェブサイト上に掲載されていた「クレプトマニア チェックリスト」をDさんに記入してもらい、接見中に聞き取った内容も調書化して竹村医師に郵送し、電話で見解をうかがって、それまた電話聴取書にして添付資料とし、保釈請求を行ないました。

しかし、この請求はあえなく却下されます。翌週、Dさんの父親が、赤城高原ホスピタルでの3泊4日のショートステイ・プログラム(注:病院併設の研修棟に宿泊し、月曜日の午前中から木曜日の午後までの間に集中的に家族会に参加するプログラム)を体験し、竹村医師とも面談して、意見書を受け取ってきてくれました(直接診断していないので診断書にはならない)。さっそく田中氏は、この意見書をメインに、身元引き受け書や誓約書、反省の手紙や嘆願書等を添付して、再度の保釈請求を行ないました。

だが、またもや請求は却下されます。あらかじめ再却下を想定していた田中氏は、さっそく準抗告の手をうち、ようやくDさんの保釈が許可されます。保釈の決定書には「再犯防止のために医師の診断を受けて今後の生活方針について検討する機会を設けることにも合理性が認められる」との記載がありました。

保釈許可から4日後、第1回目の公判が開かれます。この初公判と同日、Dさんに対して2週間の旅行許可が下りたので、さっそく赤城高原ホスピタルへと向かい、ショートステイ・プログラムを体験。次回公判まで時間的余裕があったので、旅行許可をさらに2週間延長してもらって、合計4週間の入院となりました。

そこでの治療プログラムの効果効用について、田中氏は「専門的知見を持たないが」と断りつつも「私の実感として言えることは、4週間の入院を経て帰ってきたDさんがまったく違う人物に見えたことである。表情は明るく、声も大きく力強く、話す内容も患者仲間との触れ合いや絆、これからやりたいこと等であり、数年間自宅を引きこもって他人との接触を嫌いぬいていた彼女とはまったくの別人であった」とコメントされています(同記事:89ページより)。

この間に担当検察官が交代したこともあり、検事側の鑑定書と抱き合わせの形で、竹村医師の診断書および意見書、そして被告人のDさんが日記形式で綴った、膨大

な「入院記録」についても証拠同意をしてもらいました(彼女の入院記録については[本人了解のうえで]後日、赤城高原ホスピタルのウェブサイト上で公開されました→***202ページ以降の「窃盗癖:症例ファイル12」を参照)。

論告・弁論では、Dさんの症状が窃盗癖クレプトマニアに該当することや、嗜癖行動が司法判断の中でどのように評価されるべきかについての意見が交わされました。担当検察官は「DSM-IV-TR」内の診断基準Aを厳格に適用しようとし、田中氏は竹村氏の見解に拠り、弾力的な適用を主張。検察側の求刑は(常習累犯窃盗の法定刑の下限である)3年でした。ちなみにDさんは、第2回公判後に約2週間、第3回公判後にもさらに約2週間、赤城高原ホスピタルに入院し、治療を続けました。

*

そして判決の日。結果は「被告人を懲役2年に処する」とのこと。判決理由の中には「本件犯行に精神疾患の影響があったこと」や「被告人が治療に積極的であること」が良情状として示され、新人弁護士の田中氏としては、かなり健闘した判決内容と言えるでしょう。

しかし、求刑3年から2年に減刑されたとはいえ、実刑は実刑です。Dさんにとって、この避けがたい判決が、その後の彼女に重くのしかかってゆきます。

Dさん自身は控訴と再保釈を望み、田中氏は控訴審の見通しを説明しつつ「審理期間中も治療を継続するならば、控訴する意味もあるので協力する」と回答しました。まだその時点では、彼女も治療の意思を失っていなかったのです。

しかし再保釈を得たにもかかわらず、Dさんの行動には徐々に鈍さが目立つようになります。短期間で赤城高原ホスピタルから戻ってきてしまい、田中氏の懸命の説得にもかかわらず、再入院はしませんでした。

ばかりか、彼女は「一度下った判決からは目を逸らせないし、収監されることの恐怖は軽減しない」と田中氏に訴えました。以前のように、回復に向けて前向きに将来を語るができなくなり、犯行前の引きこもり状態と過食嘔吐が復活。服役のつらさへの恐怖が、再び彼女の心を蝕んでいったのです。

控訴は棄却に終わり、田中氏はDさんの再々保釈を得たうえで、上告の見通しについて相談しました。Dさんは「減刑を望んでいるわけでも治療を受けたいわけでもなく、

今の状態を少しでも延ばしたいので上告したい」と懇願しましたが、田中氏は「治療継続の意思がないと知りながら、治療可能性や治療への積極性を上告理由に書くことはできない」として、引き続きの国選受任を断りました。しかし、より大きな理由、本心で感じていたことを、田中氏はこう綴っています。

「控訴審でのやりとりから彼女が私に依存しかけているのではないかと感じられたことがある(中略)いずれにせよ、彼女を治療へ向かわせられない自分は、彼女と距離を置くべき時期にあるのではないか。そんな疑問が根底にあった」(同記事:91ページ)

Dさんの上告審は、東京の国選弁護人が担当することとなりました。

*

Dさんとの最後のやりとりから4ヵ月が経ったある冬の朝、Dさんの父親から田中氏の元に電話が入りました。「今朝、Dが、自宅で自らの命を断った」という知らせでした。

両親も知らないところでDさんの上告は棄却され、判決は確定していました。収容のための呼出状が届いており、自殺した当日が出頭日でした。葬儀の数日後、Dさんの両親が田中氏のもとを訪ねて、感謝の言葉をかけました。彼女の形見には「先生は長生きしてくださいね。70年後くらいにまた会いたいな」というメモが添えられていました…。

「もしも自分が弁護人でなければ」あるいは「もしも上告審までいっしょに闘っていれば」といった後悔の念に、田中氏はさいなまれました。そんな中、彼女の最後の手紙にこういう言葉が綴られていたのを、田中氏は発見します。「もっと早い段階で病院の治療を受けていたら、違う生き方ができたのかな……」。

Dさんがもっと早く赤城高原ホスピタルにつながったからと言って、彼女が再犯をしなかった保障はないし、このような結末を選ばなかったとも断言できません。しかしその時点で、彼女は「自分の病気は治せるのかもしれない」という希望を抱くことができたはずです。そして、そういう「前向きで積極的な気持ち」こそ、一度罪を犯した人間の更正には欠かせないものなのです。

「本来ならば(弁護人の仕事ではなく)行政や福祉の分野の仕事なのかもしれない」と前置きしつつ、罪を犯した被疑者(被告人)に「新しく生きようとするきっかけ」を与え

ることのできる最も身近な存在が他ならぬ弁護士なのではないか、というふうに田中氏は考えるようになりました。

彼女が3度の服役で受けたのは「治療」ではなく「教育」である。(中略)それに引き換え、たった2ヵ月ほどの赤城高原ホスピタルでの生活で彼女が得た感動と前向きな姿勢は偉大なるものだった。(中略)結果として彼女は挫けてしまったけれど、あのと時の彼女の「治そう」「立ち直ろう」という意思は本物だった。そして、結論は同じところに至ったとしても、その過程を経た彼女は、経なかった彼女とはきっと違う納得を得ていたはずだ。(同記事:92ページより引用)

なお、竹村医師から、Dさんに関して以下のようなコメントをいただいたので、ここに掲載し、故人の冥福を改めて祈る次第である。

自殺の2日後にDさんからの絵葉書が竹村の元に届きました。季節の挨拶の後に、以下のような言葉で締めくくられていました。

「近頃、たまに、入院生活は現実だったのかしら、と考えることがあります。楽しい夢でも見ていたような、あんなに暖かい空気に包まれた場所は初めてでした。できることなら、あのままずっと入院していたかったです。素敵な思い出をありがとうございました。今後のご活躍をお祈りしています。〇〇」

ハガキの消印が自殺の当日でしたので、おそらく、真夜中にこの葉書を投函してから、自宅に戻り自殺したものとされます。退院後の7ヵ月を孤独に過ごし、自殺を決意し、たった一人でこのような準備をしてこの世から旅立って行った彼女の想いを考えると、憐れでなりません。